

〈こども政策推進事業費補助金〉令和7年度補正予算 5億円

事業の目的

- こどもの視点に立った多様な居場所づくりが行われるよう、地方自治体におけるこどもの居場所づくりの支援体制の構築等に必要の実態調査・把握や広報啓発活動の支援を行うとともに、NPO法人等が創意工夫して行う居場所づくりのモデル事業を継続して実施する。
- 本事業により、こどもの居場所づくりを促進するために有効と考えられる、「こどもの居場所づくりコーディネーター配置等支援事業」の実施率の向上につなげる。
- また、地域におけるこどもの諸問題に対応するべく、今後の児童館の活動を開発し、普及することを目的にモデル事業を実施する。
- (1)～(3)は「こどもの居場所づくりに関する指針」に基づく取組に対して、3年間(令和6年度～令和8年度)、(4)は3年間(令和7年度～令和9年度)で集中して支援を行い推進するものである。

事業の概要

(1) 実態調査・把握支援

居場所の有無をはじめ、こどものニーズ等の現状を把握するための実態調査を実施する地方自治体に対して、財政支援を行う。

(2) 広報啓発活動支援

こどもの居場所づくりを推進するために、以下に掲げるような広報啓発の取組を行う地方自治体に対して、財政支援を行う。

〈広報啓発の取組例〉

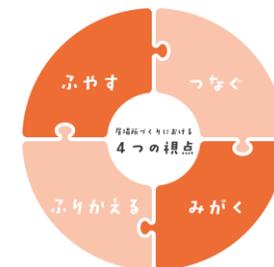
- ・こどもと居場所等をつなぐためのポータルサイト等の制作・改修
- ・居場所マップの作製・配布
- ・人材の発掘に向けたシンポジウム等のイベントの実施 等

(3) NPO等と連携したこどもの居場所づくり支援(モデル事業)

NPO法人等の民間団体が創意工夫して行う居場所づくりやこどもの可能性を引き出す取組への効果的な支援方法等を検証するためのモデル事業を実施。

〈想定されるテーマ例〉

- ・早朝のこどもの居場所づくり
- ・新たなテクノロジーを活用したこどもの居場所づくり
- ・ユースを中心とした居場所づくり 等



(4) 児童館等を活用した地域課題解決モデル事業

すべてのこどもが利用できる児童館の特性を活かし、現行の「児童館ガイドライン」に示された内容を超え、今後期待される活動に取り組む自治体に対して事業費を補助する。

〈活動例〉小学生の生活の連続性に配慮した地域人材のコーディネート(学校支援人材や放課後児童支援員等の放課後支援人材の発掘、養成等)

実施主体等

(1) 実態調査・把握支援

【実施主体】	都道府県、市区町村	【補助率】	国 1/2、都道府県・市区町村 1/2
【補助基準額】	1 都道府県あたり	7,489千円	1 指定都市あたり 5,842千円
	1 特別区・中核市あたり	3,683千円	1 市町村あたり 2,080千円

(2) 広報啓発活動支援

【実施主体】	都道府県、市区町村	【補助率】	国 1/2、都道府県・市区町村 1/2
【補助基準額】	1 都道府県あたり	4,502千円	1 指定都市あたり 4,090千円
	1 特別区・中核市あたり	3,849千円	1 市町村あたり 2,107千円

(3) NPO等と連携したこどもの居場所づくり支援(モデル事業)

【実施主体】	都道府県、市区町村、民間団体(全国展開しているオンラインの居場所に限る)
【補助率】	国 10/10
【補助基準額】	1 団体あたり 5,000千円(上限) ※同一団体の同一事業は採択しない。

(4) 児童館等を活用した地域課題解決モデル事業

【実施主体】	都道府県、市町村
【補助率】	国 10/10
【補助基準額】	1 自治体あたり 5,000千円



新潟県新潟市

新潟市NPO等と連携した こどもの居場所づくり支援モデル事業

【この事例の詳細はこちら】

<https://raylabo.wixsite.com/mysite>



事業目的

既存のこどもの居場所以外の新たなこどもの居場所の必要性和重要性を検討するために実施した事業。

NPO法人などの民間団体が新潟市の施設を使い、こども達に**日常とは違う場所でこども同士や地域の大人たちと体験や交流、寝食を共にする事業**を実施できるかを検証した。

事業概要

新潟市の宿泊可能施設を利用し、公募により集まったこども達による**1泊2日の宿泊体験活動を計5回実施**した。

各回共通で、こども同士の自己紹介から始まり、ご飯づくりのお手伝い、2日間の中でやってみたいことや将来の夢の発表会、終わりに参加者一人一人の良いところを褒める表彰式を行った。

また、各回個別に外部講師を招いての新潟総踊りの練習や落語をとおしてのお笑いの体験などを実施し、**こども達が普段できないような体験活動を実施**した。

活動の成果

こども達が自ら意見を出して、挑戦し、お互いの違いを認めあいながら活動を行うことで、**自己肯定感や「次はこれをやってみたい」などの意欲を育む**ことができた。

初めて出会ったこども同士と一緒に遊び始めるなど、**コミュニケーション能力を高める**ことができ、携帯電話やゲームから離れ、自然があふれる環境での活動や仲間との関わりを楽しむことができた。

自分の親が居ない環境でも、スタッフが笑顔で積極的に名前を呼んで声をかけ、褒めあうことを意識しながら関わることで、無口な子が挨拶したり話せるようになるなど積極性を引き出し、**豊かな成功体験に繋げる**ことができた。

実施時のポイント

時間に追われない空間と、こども達とスタッフがリラックスして一緒に楽しむ、安心できる雰囲気づくりが重要。

【工夫した点】

- 呼んでほしい名前をひらがなで書いた名札や紙コップを作ること。
- 挨拶係、掃除リーダーなど自分たちで担当を決めて**1人1人に出番を作る**こと。
- トラブルが起こった時はすぐに事情を聞いて**話し合いで解決**すること。

担当者の声

日頃のこども食堂の運営の中で、**こども達の体験活動の機会が少なく、また、世帯年収の差が体験の機会の格差につながっている**と感じている。今回のような公募型で普段と違う仲間や場所で一泊二日の寝食を共にする生活や体験をすることは、社会性と感性を育んでいく貴重な機会だと考えます。

